

会 議 録

会 議 名	第 1 1 回 第 2 次小金井市芸術文化振興計画策定委員会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課		
開 催 日 時	令和 3 年 2 月 16 日 (火) 午後 1 時 - 午後 3 時		
開 催 場 所	オンライン会議ツール zoom を使った開催		
出 席 委 員	大澤寅雄 委員長 伊藤裕夫 副委員長 小林勉 委員 小林真理 委員 福沢政雄 委員 桑谷哲男 委員 戸舘正史 委員 西村德行 委員 中原和樹 委員		
欠 席 委 員	水津由紀 委員 山村仁志 委員 野澤佐知子 委員		
事 務 局 員	1 事務局運営補助 特定非営利活動法人 S T スポット横浜 小川智紀、田中真実 2 小金井市 コミュニティ文化課長 鈴木遵矢 コミュニティ文化課専任主査 吉川まほろ コミュニティ文化課主任 津端友佳理 コミュニティ文化課主事 小野智広 3 事業実施者 特定非営利活動法人アートフル・アクション 宮下美穂		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由	可	傍聴者数	0 人
会 議 次 第	1. 計画 (案) に対する意見 (パブリックコメント) 及び検討について 2. 計画の推進体制の検討について		
会 議 結 果	別紙のとおり		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料	・パブリックコメント結果 (案) ・第 2 次小金井市芸術文化振興計画 (案) ・計画全体図		

## (開会)

### 1. 計画(案)に対する意見(パブリックコメント)及び検討について

【大澤委員長】第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会も最終回となります。今日の議事は2項目あって、計画案に対する意見、パブリックコメントおよび検討についてということと、計画推進対象の検討について。最後に皆さんから一言ずつでも、この2カ年度に渡った11回の委員会でどんなことをお感じになったか、振り返りも含めたコメントをいただきたいと思います。

【事務局・吉川】パブリックコメントに先立ち庁内検討を行い、3課から意見をいただきました。市内でパブリックコメントを行いましたのが、今年の1月5日から2月5日までで、意見の提出としては4人からいただいております。パブリックコメント結果については別紙で取りまとめました。いろいろご要望なども入っているのですが、あくまでのこの計画に対する意見ですので、検討結果については資料のとおりまとめました。

【事務局・小川】庁内検討の委員会から上がってきた部分が4つ、パブリックコメントから上がってきたものが5件です。1番が『豊かな自然環境』というのを、『緑豊かな環境』にしてください。という環境政策課の方からご意見がありましたので、そこを修正しました。2番ですが、小金井のみどりについて環境政策課所管の計画に準じる形で表現をあわせました。3番も同様に修正しました。4番は、公民館本館からご意見をいただきました。「東日本大震災、新型コロナウイルスと相模原事件を全部並列に並べてしまうのは違和感があるから、そこはやっぱり分けたらどうですか？」ということですので文章を分けました。次に5番から9番です。5番が地域の連携について、NPO、地域の図書館、大学、都立公園、ボランティアの列举に「大学と都立公園」を加えてください。ということでした。問題がないので加えました。6番ですが、小金井の文化の土壌といったとき「多摩地域」ということばが入っていてもいいというご意見でした。これもいただいた意見の方向で修正しました。7番は「継続的な芸術文化事業の推進」を「芸術文化事業の継続的な推進」というもの。指摘いただいたものの方がきれいで、文意が変わりませんので修正をかけました。8番と9番は、自然とつながりが持てるものにしてください、ということです。この「自然と」ということばは、緑豊かなという意味の自然ではなくて、副詞的用法というのかナチュラルという意味の自然かなと思いました。気軽に関われるという意味でとらえた場合、すでに書いてあるから現行のままでも大丈夫かなというのが8番と9番です。

【大澤委員長】庁内意見とパブリックコメント、どちらも抜本的な修正や、趣意に対する意義や意見があったわけではないと受け止めています。小金井の特徴だと思ったのが、環境政策課の計画に沿った表現を、という意見です。庁内で施策の表現に統一感を持たせることは行政としても大事なのですが、ここで環境と文化、芸術がある種つながりを持ってお互い関心を持ちあうことで、第2期の文化芸術振興の特徴と

して打ち出せていけるといいと感じました。私はポジティブな意見、建設的な意見だと受け止めています。

【伊藤委員】いま言われたように、基本的には用語の統一感などについての意見が入っていますが、根本的な改変の必要はないと感じました。ただ、最初の方が「具体性がないのでコメントしづらい」と書いています。以前も問題になったところです。今回の計画が基本計画なのか、実施計画なのか。つまり、アクションプランを含むものか含まないものかということを経済の段階で押さえておく必要があったと思うのです。ただ10年間の計画なのでアクションプランにはしがたい。あくまで議論の中で作っていくための1つの大きなルールであって、その上に走っていく細かな電車や乗客の話は、今後走りながら検討をしていく必要があるでしょう。それについて、推進委員会という形で計画の中に道筋は書いていますが、後でこれを実行するための考え方は整理しておく必要があります。もうひとつ、悩ましいところなのですが、役所用語と市民の用語のズレがあります。今回の場合、環境セクションからの指摘は大きな問題ではないと思うのですが、なかなか分かりにくいところもあります。今日後半の議論につながってきますが、解説版を作ることも考えたらどうでしょう。実はいま桑谷委員とも一緒している多摩市の計画づくりの会議でも言っているのですが、中学生が読んで理解し、自分も協力したいと思うようなものにしていく必要があります。

【大澤委員長】2点指摘がありました。推進体制、推進委員会の検討は、また後半の議論でも進めます。いかに市民に理解を促す表現にし説明するかという話も、推進体制とあわせて意見やアイデアをいただこうと思います。

【福沢委員】このパブコメに関しましては、特にコメントはありません。逆にこのまとめ方でいいと思います。

【小林真理委員】環境系の部局の指摘はよく分かります。武蔵野は住宅開発が進んでいくときに、環境を守ること自体を文化にしてきたところです。だからこだわりが強く、文化を守るために環境を守る、環境を守るために文化を守るという感覚が強い地域だと思います。上手な連携が求められます。そういう意味では、環境系の部局から積極的に意見を言っていたのは良かったと思います。文化の分野は、自分たちの部局だけで推進していくものではありません。計画をきっかけに、いろいろなところとつながっていければいいです。前の計画づくりの際は、はげの森美術館とか市民交流センターは計画の俎上の載せる対象ではなかった。それが今回、市の施設として計画と一緒に担う仲間だという形に持って来られたのは大きな意味があります。要はこの計画を今度どう動かして行くのか、その体制を議論すれば、小金井の文化がさらに次の段階に来たのだなという感じがして、発展的でいいと思います。

【大澤委員長】パブコメで寄せられた「自然とつながりが持てる場所」は、書いた人の意図はナチュラルでなく、ナチュラルとエコロジーをつなげられる芸術文化というイメージを持った意見なのかなという気がします。ただ、これは解釈の差があるかもしれないし、そこに特化した表現をすることも難しいです。この芸術文化振興と

いう観点から広げすぎる感じもあります。でも、小金井の市民感情にある自然や環境が文化と近い領域なのだと感じます。

【小林真理委員】多摩地域の住宅街を形成して来た人たちの、緑や雑木林、はけの森に対する思いは、後から新しく入って来た人からすると、理解できないくらい強いようです。

【オブザーバー・宮下】文化は、とらえ方の間口がとても広いです。活動している方は、ここは環境、ここは文化という具体的な線引きをあまり考えていないと思います。だから野川を散歩し、その途中で史跡も巡るし、スケッチもする。特に線引きをする必要はないと思います。

【大澤委員長】このパブリックコメントにあった「具体性がない」という意見は「ごもっとも」と感じるどころがあります。伊藤委員のいう通り、10年スパンの計画はそんなに具体性を持てるものではないということもあります。あと、計画案に対して批評的なコメントで「ある意味、当たり前のことが並んでいると読めました」というものもありました。コメントされた方が、どれぐらいほかの基本計画を見ているのかわからないですが、僕は当たり前とは思わないのです。結構、小金井の特徴が出ているし、当たり前とは思わないなと素朴に思ったところでした。

【戸舘委員】結局この計画を誰が使いこなすのかという話だという気がしました。パブリックコメントを寄せている人たちは、計画を市民が使いこなすという立場で意見を寄せられているからこそ、具体性を欠くとご意見をされているのだろうなと考えました。これをどう推進していくかの具体的な絵、骨格、方向性が必要ですね。伊藤委員がいったように副読本みたいなもので示していく必要性を強く感じましたね。

【事務局・小川】ここまでの意見をまとめて、全体図をまとめてお送りしました。まず「基本理念」があり「具体的な理想像」「基本施策の展開」「実施主体」と流れる図があります。その中に「3つの大事な視点」があります。あわせてご確認ください。

【桑谷委員】「みんなの力で誰もが芸術文化を楽しむまちへ」ですが、振興計画の表紙と表現が違います。どちらが正解ですか。

【事務局・小川】「みんなで 誰もが 芸術文化を楽しめるまちへ」が正解です。全体図にミスがありました。失礼しました。

【桑谷委員】「施策事業の展開」の2つ目「地域が芸術文化に参加する」は言い回しとしておかしいのではないかと思いました。それから「あらたな機会をつくる」の「あらたな」も確認したい部分です。

【事務局・小川】確認ミスでした。失礼しました。こちらで修正します。

【桑谷委員】本編ですが「一緒に働く」という表現はおかしい。「活動することによって」の方がいいかと思います。

【大澤委員長】「働く」というのが共に働く「共働」とか、協力して働く「協働」をいっているの、必ずしも労働ということではないかもしれないですけど、作業とか、ワーク・トゥギャザーと言いますか、「一緒に働く」で解釈は僕はそんなに悪くないと思いますが。

【桑谷委員】それから「市民の交流の場」の部分ですが「芸術文化を考える上で」は「芸術文化を考える上でも」と「も」が入った方がよいと思いました。

【大澤委員長】大きな方向性が変わらないので、委員会の中で他に案や異論がなければ、桑谷委員の意見を踏まえた修正をしたいと思います。

【伊藤委員】桑谷委員の指摘にあった、「働く」は僕も「活動」に変えたほうがいいと思います。「働く」ということば自体がどうもやっぱり 20 世紀の中で労働のイメージが強くなりすぎた感じがあって、ワークのイメージもレイバーになってしまっているところがあります。文字通りコラボレーションは協同のレイバーなのですよね。協働ということば自体が日本語で定着したので、これを変えるわけにはいかないのですが、漢語として使う場合には「働」でいいと思いますけど、訓読みの使う場合には、「作業する」「活動する」と書いたほうがいい。「働く」と変な感じだということは桑谷委員に指摘されて、気づきました。

【福沢委員】全体図の「推進主体」のところ、小金井市がアクションプログラムを作ることになっています。これも市の役割として入れたらいかがでしょうか。

【大澤委員長】小金井市が「財政的な支援」を行うということで、公立文化施設に向かって矢印がありますが、この位置づけとは別にイメージがあるということですか。

【福沢委員】計画のスケジュールに、具体的な事業の内容を明確にするため、市は推進委員会を作り、アクションプログラムを作るとあります。今回の計画として重要な要素ですから、全体図でも市の役割として入れたらどうかという提案です。

【大澤委員長】大事なご意見ですね。市が推進委員会とアクションプランを策定することを、全体図の中にも位置づけを明記したほうがいいという意見です。僕もあっていいと思うのですが、デザインやレイアウトで位置づける方策は知恵が必要な気がしますし、時間的に難しいと思います。他の方がいかがですか。

【小林勉委員】市民に渡るメインのものになるのですよね。例えば目次より先にこのページがある作り方のほうが分かりやすいかなと、一市民の立場で思いました。今までのいろんな意見が見やすくなるのかなと思うのです。

【中原委員】僕が気になったのは、振興計画の「市民を軸に計画の担い手」という部分です。今回の僕がすてきだなと思っているのが、方向性だったり規模がでこぼこしていてもそれを平たんにならすのではなく、その違いを認識してそれぞれの活動の規模だったり関わり方で差別化をして関わるができるという多様性だと思っています。それが、全体図だと市民、NPO、アーティスト等というのが同列です。簡易的な図なのでどこまで書くかだとは思いますが、これを見たとき均一化される行政のやり方に向かっている感覚を受けてしまいます。それはすごくもったいないと思いました。

【小林真理委員】実施主体の書き方はお任せしたいとは思いますが、大きさも含めて工夫していただきたい。小金井市と公立文化施設と関係団体の大きさについてです。それと、例えば財政的支援の矢印が公立文化施設に行っていますよね。財政的支援を小金井市がしているのは市民に活動してもらうためですよね。そこがこの図だと理解しにくいです。何のためにやっているのかと言ったら、基本は市民のためだけれど、そのための機関としてセンターやはげの森がある、という感じにしたい。また「施設」と「市民、NPO、アーティスト」の関係も、専門的な支援を文化施設が与えてあげて市民、NPO が協力してもらうというような双方向性があってもいい。例えば、市民交流センターはあるところは専門的だけれど、市民の専門性がないとできない部分もある。一方通行みたいな感じが気になります。矢印をつける方がいいか、役割的なことを小さく書くのか。今の書き方だと小金井の良さが表現されていない感じがします。

【伊藤委員】原案は僕が作ったのですが、実施主体の部分であまり役割分担になるような書き方をしたくなかったのです。財政的支援も公立文化施設に対してだけするものではありません。必要な場合には市民やNPOにもするのです。この辺は明確に書くことで誤解を受ける感じはしています。いずれにせよ全体図は、計画を全部読まなくてもこの計画を一目瞭然で見てわかるようにしてもらいたいというのが大きなねらいです。これを計画書の最初に入れることは賛成ですが、あまり具体的なことを書かないほうがいい。ただ、この計画書とは別の解説書、解説パンフレットを作るときには、個性ある活動をしている個人や団体がイラストでいっぱい入っていて、彼らがにぎわいを持って中心になって動いていて、一種の文化的コモンズみたいな形で、ほかの公立文化施設や商業施設となどとも連携しているという形にしたい。したがって解説版はイメージを入れ込んでいいと思うのですが、計画書に付ける図として、計画に書いていないことまで書けませんし、誤解を受ける書き方もまずいので、すっきりさせて載せる程度でいいのではないのでしょうか。もう1点、アクションプランや推進委員会ですが、実施主体が連携し合って推進委員会を作り、それがアクションプランに反映されていくような図がいいです。つまり、取りまとめるのは市ですけれども、実際には市が勝手に作るのではなくて、ここに関わっている実施主体の話し合いの協力、連携の中で一推進委員会がその場だと思えますけども一その中でアクションプランが生まれるという図が書ければ入りたいです。

【大澤委員長】全体図については、いただいた意見を踏まえつつ作り込んでみます。

方向性としては、具体的な方向に書き込みすぎないようにします。全体図は、特に実施主体の部分に関しては有機的なつながりや、立場に応じた関わり方ができることが伝わるような工夫をしてみたいと思います。

【西村委員】今までの具体的な活動、アートフルアクションがしてきた内容がどこに位置づけられるのか、計画にさかのぼれるような視点の副読本が入口としてあると、新たに活動をはじめたい人たちへの糸口になるのではないかと思います。

## 2. 計画の推進体制の検討について

【大澤委員長】それでは、計画の推進体制の検討に入ります。

【事務局・小川】この策定委員会は計画を作るための委員会で、一応これで最終回で、小金井市が4月以降計画を進めていきます。そこで、この会として次につなげておく考え方をまとめておくことがあれば、ここで確認したいと思っています。

【大澤委員長】残りの時間は、策定委員会として、ぜひこの計画を推進していかってほしいとお願ひするとともに、具体的な進め方についても提案し残していきたいと思いました。私は「小金井市芸術文化振興計画推進委員会の運営について」としてメモを作成しましたので、説明します。

「第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会は、計画に示された小金井市芸術文化振興計画推進委員会の設置・運営に向け、推進委員会の組織、運営などを次のとおり提案します。

目的：計画で示された「みんなで 誰もが 芸術文化を楽しめるまちへ—協働・教育・包摂と芸術文化」の理念をもとに、小金井市の芸術文化振興に関する協議を行うほか、連携、協議、情報交換、調整、相談、評価を行い、必要な調査・提言を行う推進委員会を設置します。

構成員：この会議では、以下の者を構成員とします。小金井市立はげの森美術館の学芸員、小金井市市民交流センターの館長または副館長など事業の統括責任がある者、NPO法人アートフル・アクションの事務局長など事業の統括責任がある者、民委員等（複数名）このほか必要に応じ、以下の者を構成員とすることができます。中間支援機能を持つ団体の事業の統括責任がある者、芸術文化政策に専門性を持つ有識者。  
運営体制等：推進委員会は、令和3年度内に最低3回程度開催します。推進委員会の事務は、小金井市役所コミュニティ文化課が担当します。会議の招集は、小金井市役所コミュニティ文化課が行います。また、必要に応じて分科会を開催することができます。委員会は、公開で行います」

計画の推進体制について、委員長からの提案でしたが、ご意見、ご質問等あればお伺いします。

【中原委員】僕自身はそんなに違和感なく感じました。

【鈴木課長】中間支援組織というのがよく見えないのが正直なところです。小金井市

でそういう役割を果たしているのがアートフルアクションだと思いますが。それから、市の設置する会議で、市の職員が委員になっている例がありません。今回は森美術館の学芸員が入っていますが、この学芸員は会計年度任用職員という位置づけで雇用されています。オブザーバーや事務局側として参加するパターンは美術館運営協議会でも行っていますが、委員としては例がないと思います。

【小林真理委員】構成員を特定しすぎだと感じます。学芸員の話もそうですが、そもそもこの推進委員会に何をしてもらおうかです。つまり、この計画がちゃんと進捗しているかのチェックをするのか、アクションプランを実際に練るときの中心になるのか。計画期間の10年を見越した割り振りでもいいと感じました。特定的に見えるのは、芸術文化に関係している人たちで進めるのが適切だということなんでしょうが、もうちょっと広い視点の人を入れてもいいです。例えば、広くまちづくりという整理にしてもいいし、これから一緒に手を携えてやっていけるかもしれない環境系の人などに入っていた方が他の政策の推進と比べてもらえるし、いろんな視点が入っていいと思いました。ほかの都道府県でビジョン評価委員会などに関わっていると、全然違う分野の方が非常にバランス感覚がいい発言をしてくださることもあります。芸術文化が駄目なんていうことは言わないのです。芸術文化の計画があって、これを具体的に進捗していくときは、こういう方法だという話を組織運営の立場からして下さる人がいて、行政に意見をするときにも利くのです。

【大澤委員長】限定しすぎるとするのは、構成員の話ですね。

【小林真理委員】そうです。推進委員会が何をするのかを明確にし、どういう人を入れていくかを考えたほうがいいですね。今の構成員だと、現場の実務者の意見かなという感じです。そういうふうな形でこの推進委員会を進めていくのか、それとも周りからプッシュする役割なのか。

【大澤委員長】現場寄りの立ち位置で、連携を重視し、かつその動き出しも顔を見て、まず動き出すことを先にやろうという提案のつもりでした。ただ、小林真理委員の意見で長いスパンの視野を持つべきという意見もよくわかります。

【伊藤委員】この計画の推進会議、推進機関のイメージの中に、2つイメージが混在しているのです。1つは、条例の9条に書かれているとおりです。「市は、芸術文化振興施策の推進に当たって、芸術文化振興推進機関を設置するものとする。2、芸術文化振興推進機関は、芸術文化の推進に係る調査検討による提言、基本計画の評価及び見直し等を行うものとする」。そして、3として「前2項に定めるもののほか、芸術文化振興推進機関に関し必要な事項は、別に定める」。条例どおりに前回の計画ではできなかったのが今回作るのだという要素が第一です。その要素から行きますと、一種の審議会に近いものだと思いますので、小林真理委員が述べたように関係者は半分くらいで第三者が入ったほうがいい。商工会や自治会を入れるかは別としても、NPOの人でも芸術文化だけではなく、まちづくりNPOや企業、商業関係、事業所を持っている人たちも当然入ったほうがいい。



他方で悩ましいのは、座組みができててもそういう人たちは言うだけ言って動かない。たぶんみなさんたちの心の中にあるのは、制度的な審議会とは違った、実際にいま小金井市で活動をしている当事者たちがもっと横に連絡を取り合って、その中には文化施設の専門的なスタッフも巻き込んで、日常的にとはいかないけれども定期的に話し合えるような機関を作ったり、具体的な事業提案をしたり、一緒に活動していく、協働していくネットワークがほしいということ。この2つの願望がごっちゃになっているのですね。

出発点として今回の計画においては、まず条例で定められている推進機関を作ることが第一にやらなくてはならない。これに関しては、市が事務局を行っていく。市で設置要項などを条例に基づいて運営していくためのもので、多少堅苦しくても、市のルールも含めて作っていく。それとは別に、フランクでフラットな団体ができないだろうか。

私が委員長として関わった富山県の南砺市の計画策定委員会では、そういった会では結構偉い人が行くのでいい意見はいっぱい出るのですが、フットワークは悪い。その委員会の下の方科会委員みたいな形で、若くて実際に活動している人たちに数名入ってもらって、その人たちを中心にネットワークを作ったわけです。彼らのが、今回でいう事務局にあたるような活動のような形でたたき台を作ってくるわけです。それと市の考えを突き合わせて、審議会で議論するというやり方にしました。そういう非公式でもないし、半公式な有志の会ができるのがいいです。逗子市でもホールができた後、推進会議として、さまざまな活動をしている方が入って来ていますが、そこだけでは弱いので、アートフェスティバルをやって行く場合には非公式のアートネットワークを作って、そちらと公式の実行委員会をつないで行くメンバーが2、3人います。正式の委員がネットワークを主催する形も含めて——いいかどうかは別ですが、二重になっているものを整理して、とりあえず2つを策定委員会としては提案する。1つは条例に定められている推進会議を作ることと、それで収まらない部分を、策定委員会に関わった市民たちがネットワークを作っていたらどうかという2つのことを提案したらどうかと考えました。

【事務局・吉川】10年間この仕事を担当し、芸術文化振興計画に基づいて事業をして来ました。アートフル・アクションのように、計画や条例とかかわって活動している方もいます。一方で、市民文化祭を企画運営している市民の方たちや、福沢委員が進められている文化協会など、いろいろな団体があります。自分たちの活動を一生懸命やることに重きを置いているので、市の政策としてどうなっているのかは皆さん、あまり頭がないし知らないのです。10年間、それをうまくつなげられないか模索しましたがうまくいかなかったのは忸怩たるものがあります。新しい計画ができるタイミング、市の要綱設置などで推進体制の委員会を作る前に、この計画ができたことで、いろいろな団体が顔合わせをするキックオフの機会を作りたいと思っています。コロナの関係でうまく顔合わせができるのかは難しいところですが、この策定委員会委員も協力してもらい、市民の文化活動の基になる計画と政策があるということを知ってほしいです。みんなで一緒にいろんな立場で、芸術文化の裾野を広げようという共有ができる機会が作れればと思います。以上です。

【大澤委員長】ここまでの意見で共通しているのは、計画を作っただけでは動かないし、それを形のあるものにし、具体的な動きにしていく必要がある。そこはみなさん、共通の思いとしてあるようですが、基本計画、あるいは条例の中での位置づけが広いので、審議会的な条例に基づいた計画や施策の進捗管理やその評価という施策寄りの話と、実際事業の現場に近いところでどう連携協力し、市民との接点を広げていくか、市民に普及していくかという現場寄りの話と、大きく二層の構造をイメージできません。どちらを先に整備していくかという話ですね。

【桑谷委員】第1次計画ができたとき、誰にどのように周知されたのでしょうか。またこの計画を、市民や芸術に関わる人たちはどのように知ることになるのでしょうか。第1次計画では何部印刷され、その後増刷されたかということが気になっていました。1次するときには、市長がこの文化の計画に対して期待しているということを使ったことを覚えていまして、どのように応えて来たのか事務局からお聞きしたいです。

【事務局・吉川】前の計画の発行部数は、今資料がなく何部とはいえないのですが、この10年の間に冊子はすべてなくなっています。それから概要版も、私が担当になった1年目の半ばにはなくなっていたと思います。市の図書館や情報公開コーナーには必ず置いてあります。計画が最初にできたときは評判になり「ください」という市民の方もいっぱいいました。概要版は、そういう方たちにお配りしました。ほかの自治体から「参考にさせてほしい」と依頼があつて送ったこともあります。たぶん5、6市は送っています。ご興味のある方には配りましたし、情報が公開されているのでどなたでも見られるところにはすべて置いたと思います。新しく課に異動してきた人も読むようにしていますし、町内各課にも配っています。美術館の職員、交流センターの方も見えています。

【大澤委員長】小林真理委員が、ここで退出です。

【小林真理委員】皆さま、大変お世話になりました。小金井市の芸術文化のこれらについて考えてくださったこと、大変うれしく思っています。昨日、市民交流センターの運営委員会があり、先ほど退出された中原委員や小林努委員もいました。若くて頑張つて活動している方々が、市の計画に関心を持ち意見をくださるようになってうれしいです。昔ながらの団体は重要な役割を担っていますが、行政に頼っている部分もあります。一方で、芸術文化活動は多岐に渡っているし、若い人たちもやりたいと思っている。市に頼らなくても、アーツカウンシル東京から助成金をもらって活動をしている人もいます。そんな中で、それぞれと上手につながりたいということ、事務局の吉川さんはおっしゃっています。熱心に活動している人たちが多い地域で、そういう人たちがこの計画に関われるような副読本を、関わりたいと思っている人がどう関われるか分かる感じのものにしてほしいです。12万の市民に理解してもらうのは大事ですが、より関わりたい、関わる可能性のある人が関われるように見せていく方法が、推進委員会や冊子を通じて提案できるといいと思いました。

【戸館委員】いま小林真理委員がおっしゃったことは、僕も考えていたことです。関わりたい人が関われるような仕掛けですね。推進委員会の形式的な委員会にぶら下がっている、非公式ながらも具体的な実行を仕掛けていくネットワークと、どう接続させるか、可視化するかが課題だと考えます。結局、行政が音頭を取った推進委員会は、できた時点でもう関係ないことになります。どう作ってもそう見えてしまう。その下の非公式の緩やかな若い実践者による、推進委員会にぶら下がっているプログラムを、どうカジュアルに見せていき、関わりたい人が関われるようなプログラムを作っていくかが肝です。そのことは、現計画のコアはアートフルアクションですが、その実施主体をどう広げていくかということにもつながっていきます。実施主体が他分野の領域に広がって行くか考えるのも、推進委員会の役割だと思います。

【小林勉委員】ちょうどこの間、宮地楽器ホールを50回使用したことになりました。今回の策定委員会に入って、いろんな市民の人たち、ほかのジャンルの人たちともっと知り合いたかったです。コロナ禍で画面越しでしか会議をできなくなったので、横のつながりがなくなったらもったいないと思っています。市民の立場でいうと、ほかの方や団体がどんなことをやっているのかと、正直よくわかりません。何か活動している人たちがまとめられる場、委員会があってもいいと思います。同時に、僕らのような小金井で活動している人たちがわかりやすい計画、委員会になればいいというのが一番の願いです。

【福沢委員】先ほど吉川さんが、推進委員会は新しい出発に際して、関係者で集まって会を開いたらどうかのお話がありました。小林委員のいう通り、お互いに知らない人が多いのです。情報交換をして、その次に何があるかという部分はまだ見えて来ないですが、集まる機会を作ることは重要だという認識を持っています。あとは、評価のことです。推進委員会が評価することになると、実施主体と評価者が同じ人がやっているような感じがしたのですが。また、交流センターのことですが、計画の推進体制で「とくに公立文化施設における芸術文化事業のプログラムの特徴づくりをより進め」というのがありますが、公立文化施設の運営委員会の本来の仕事と重なるところもあるので、仕分けした方がいいと感じました。それから「小金井市の芸術文化振興に関する協議を行うほか、連携、協議…」とあるのですが、最初に出てくる「協議」と、違う分野の「協議」があるのか。あるならそれは残してもいいのですが。また鈴木課長のおっしゃった、はけの森美術館の学芸員を推進委員にすることについてです。仕組みの問題があって難しそうですが、アクションプログラムを市が作ることになっていますから、学芸員の意見は市の中で反映して組み込んで行くしかないと感じました。

【大澤委員長】推進委員会の役割の1つとして評価を掲げています。福沢委員は「評価」は、連携や協議などほかの項目と「評価」が違うレイヤーにあるというご意見だったかと思います。私は、これをトータルに、PDCA といつか、計画をして実施して評価を行い、また再構築していくサイクルの1つだとしてとらえています。ただ、その評価が自己完結的に決まった評価指標でやればいいというものではなく、市民にもNPO 関係者からも意見を聞きながら、どう評価すれば市の文化を高め合うことにつ

ながるのか模索することを推進委員会としてもやっていこうということです。推進委員会として市民やNPOなどと作っていこうと僕は読んでるので、別レイヤーというわけでもないと思っています。他の方、ご意見があればお願いします。

【西村委員】次の具体策をどうするのか。さまざまな既存の団体が関わり、まず発信するところが重要だと思っています。そこにどんどん参加して来られるような体制が重要です。以前会議で伺った「プラットフォーム」という考えは大切に、そういうものを必要としている人たちが来たり、発信したい方がそこから発信する場所として、場所があったり人がいたり、そこが維持されていることが必要だと思っています。私の学生はいま宮下さんのところでお世話になっていますが、継続して行われている場所があり、そこに行ったら何かあるかもしれない、そこに行く自分も何か発信できるかもしれないというプラットフォームが必要だと思います。いま子育て支援のワークショップをしているのですが、市や区を越えて保護者のネットワークがあるので。この前も保護者の方が「こんなことをしているなら、有志の会として発信しますよ」と協力してくださいました。そういう場所の維持が必要です。

【大澤委員長】策定委員会の役目は終えようとしています、委員長としてはこの計画を進める当事者としても明確な立ち位置のオブザーバーの宮下さんとして、計画が絵に描いた餅でなく、具体的にそれを推進していくための担保を必要としていると思うのですが、意見をください。

【オブザーバー・宮下】これまで、私たちが計画に関する事業委託を受けて、事業運営することを12年間やって来ました。オリンピックが延期になって財政状況が変わっていくと、事業費として昨年度と同規模のものを予算として用意してもらっても、今までのような事業展開が現実的に難しくなってきます。もう1つ、パブコメにも書いてくださった方がいますが、もっといろんな人が関われるようにしてほしいとされていることがあります。その2つを合わせると、私たちが、実際に現場に出て行く事業主体になるより、たくさんの方が集えることのできる場づくりが重要になってくる。また、今まで美術館と交流センターと芸文の事業の3つのトライアングルが、どうしたらうまく回って行くかという話を何年か前からずっと模索して来たけれども、それは残念ながらちっともうまく行かなかった。同じ芸文計画の上に乗って来る主体が助けてもらわないと、もうできないと思うのです。学芸員がここまで議論のあった行政上のポジションだったとしても、お互いにできることを話し、役割分担をしていくようなことが重要です。お皿に対して事業費が付いていると考えた方が、面白いのではないかという気がします。そうでないと、少ない予算で私たちがキリキリ言って事業をしても、たくさんの人、市民のいろんな層に届くかという心もとないのです。実施のレベルでは、むしろやりたいことを抱えている方々が関わって来ることのできる事業とした方が、税金も無駄にならなくていいと感じます。

【大澤委員長】いただいた意見の中で結構大事なエッセンスを整理します。条例に基づく推進委員会が条例で決めているんだからそれは作ろうということ。閉じた組織ではなく、いかに開かれていて、現場につながって行くことができるかの仕組み作り。

委員と準委員、あるいはフォーマルとインフォーマル、何かしら関わり方の自由度が担保されたものが必要なんじゃないか。この先、提案を委員長としてしたいと思いますが、どんな形でアウトプットにしましょうか。

【伊藤委員】策定委員会として計画書を作った段階で、1つはやっぱり条例に基づいた推進機関を作ってほしいということです。構成メンバーが、実際に公立文化施設の人が入ったりすると評価できない。ですから、メンバーまで書く必要はないと思います。それとは別に、コロナの状況次第ですが、夏前にでも市民向けの説明会を兼ねた交流フォーラムをぜひ開いてほしい。そこには幅広い市内で活動されている方たちに声をかけ情報交換もできるようなものにする。文化だけではなく、環境保護活動をされている方、あるいは学校関係の人、商店街のにぎわいをつくっている人にも声をかける。計画の解説版を配りつつ、むしろ自分たちの活動を発表しあい「計画ができたので、今後何か一緒にやっていきましょう」と最後に誰かがいってくれるような会を持ちたい。この2つをお願いしますという形で、出せばいいと思います。

【大澤委員長】私も考え、ご協力を伊藤委員にもお願いし、提案できればと思います。ありがとうございました。最終回の委員会ですので、委員の皆さん、これからの期待を含めてメッセージを1人1分以内ぐらいでお願いします。

【福沢委員】あつという間に過ぎた感じです。中でもコロナ禍があり、非常事態宣言などの制約下でありながらも皆さんといろいろな交流、意見交換ができ、ある意味では楽しかったです。どうもありがとうございました。

【戸舘委員】パブコメで「当たり前なことしか書いていない」というくだりがありました。書いた人の意図は「文化のあり方として当たり前だ」という意味で書いたのかなという気もしました。計画で書かれているこの文化のありようを、当たり前だと思う人がいる町なのですよね、小金井というのは。だから、潜在的な可能性があり豊かな心を持った市民がたくさんいるところなのです。伸びしろがあるし、文化を作る方にとってもやりがいがあるのだな、という思いを強くしました。1年間ありがとうございました。

【小林勉委員】1年間ありがとうございました。個人的には、市役所の方々の意見を聞いたのが楽しかったです。演奏しているだけだとそういうお話も聞けないので、そういう意見をたくさん聞いたのが楽しかったです。

【桑谷委員】お疲れさまです。参加させていただいて勉強になりました。僕にとっても大きな財産になりました。10年間という時間は長いので、その間に社会が変容し、芸術文化の役割も変わっていく可能性があります。それを考えて芸術文化に関わっていきたいと思います。また皆さんとお話できればと思っています。

【西村委員】お世話になりました。いろんな方々と、ここでつながりがもてたことは私にとっても財産です。ありがとうございました。計画に意見もあったかと思いますが、

私は日常の会話に近いことばで語られていると思い、うれしく読みました。トライ・アンド・エラー、とにかく失敗するかもしれないけどまずやってみようよという、少し背中をポンとたたいてくれる文言が書かれていて、またそのプロセスを共有しているというの、温かな委員の皆さんの心の表れではないかと思います。また、学生とも関わらせていただければと思います。

【伊藤委員】いい経験をさせていただきました。こういった計画を作るときに、行政が基本的な案を作って、委員会のほうは少し「てにをは」を直したり、多少追加したりしてまとめ上げていくというケースが多いのです。今回の小金井のように、ゼロからみんな手作りで作っていくということは、まれなケースです。委員長の進め方で初めはどうなるか心配でしたが、皆さんたちから出て来たことば、キーワードは結構計画書の中に生きているのですね。「トライ・アンド・エラー」などはまさにそうだと思います。こういった形で作られていく計画は、僕もいろいろ関わってきたのですが、初めてです。本当に感謝します。どうもありがとうございました。

【大澤委員長】ありがとうございました。計画策定の委員長をやったのは初めてです。よく私に委員長をさせてくれました。「こうやって、ワークショップ形式で進めよう」というのは簡単だけど、事務局は本当に作業が大変だったと思いますので、事務局に感謝しています。小金井が魅力的なまちになっていくための10年間の計画づくりができたので、10年後が楽しみです。「10年前、こんな当たり前の議論をしていたのか」といえるような姿を待ち望んでいますし、もしそうならなかったとしても、「何でならなかったのだろう？何が足りなかったのだろう？」と私もぜひ考えたい。そのときはもっと若い人に委員長をやらせてもらって、私を委員で呼んでもらえればと思います。ありがとうございました。

【鈴木課長】ありがとうございました。2カ年にわたる計画策定作業ですが、コロナの影響もあって途中で本当にどうなるか心配しましたが、皆様のご協力を得てここまで来ることができました。伊藤委員のあいさつでもあった通り、行政で作る一般的な計画の策定作業とは大きく違うおもしろい、ほぼ経験したことないような形の作業だったので、やっている市の担当者も楽しみながらできたというふうに感じています。この計画ができて、来年度からこれを担って進めて行くわけですが、楽しみであると同時にまた大きな宿題を背負ってしまい、身が引き締まる思いだというのが正直なところです。委員長、委員の皆さまには大変お世話になりました。非常に大きな責任を抱えて、令和3年度から10年間頑張っていくわけですが、私も10年後に市役所にいないので、どうなっているかのぞきに来ようと思います。ありがとうございました。

【大澤委員長】それでは、第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会、これですべての予定を終えました。皆さん、大変お世話になりました。本当におしまいです。ありがとうございました。お疲れさまでした。

— 了 —